

特別支援教育を「特別」にしない取り組みを

Approach that values each one under special support education

黒川 君江
Kimie Kurokawa

東京コーディネーター研究会事務局長（文京区立小日向台町小学校・通級主任）
Secretary-general of Tokyo Society for Coordinator (Kohinatadaimachi Elementary School, Bunkyo, Tokyo)

要旨：通常の学級に学ぶLD, ADHD, 高機能自閉症等の子どもたちは、学習面や生活面で困難さを抱え、様々に苦戦している。特別な配慮や指導があることで、この生きづらさが軽減できる場合がたくさんある。始まったばかりの特別支援教育だが、教育に携わる全ての人々が、「個を大切に」するという当たり前なことをどう深め、システム化できるか考えていけたらと思う。そのためには、授業改善の視点からの研究を進める、誰もがコーディネーターになるつもりで関わる、社会性を育てる視点をもつ（通級等での小集団指導を含め）、できることやれることからどんどん取り組んで、効果的な実践を伝え合うことが重要だと思う。特別支援教育の今ある財産は、意欲と創意工夫だと感じている。

キーワード：授業改善、誰もがコーディネーター、社会性を育てる、小集団指導、実践交流

はじめに

平成13年度から15年度と、文部科学省の研究開発学校（文京区立駒本小学校）で、軽度発達障害のある児童の支援について研究した。これは特別支援教育の在り方を探る草分けの研究だった。研究開発の発表が終わった一年後、研究に携わった中心メンバーを軸に、特別支援教育をもう一步実践的に考えていこうと、「東京コーディネーター研究会」が発足された。学芸大学名誉教授の野村東助先生を会長に、森秀一郎先生（林町小学校長）を副会長に、現在、東京都の「予め指定する研究会」の認定を受け、約200名を超える会員数で研究活動を行っている。

「東京コーディネーター研究会」の研究の柱は、二つある。『指導』と『連携』である。

通常の学級に学ぶLD, ADHD, 高機能自閉症等の子どもたちに、どんな指導が効果的か、どのように連携するとよいのか、具体例を収集し、話し合いで深めてきている。

全国のコーディネーターの皆さんは、19年を前にして、それぞれ抱負もあり、悩みもあることと思う。現場にとっては、実践できることを、続け、発展させることが大切になる。ぜひ、ご一緒に考えていけたらと思う。

1. 特別な支援を求めている子どもたち

通常の学級に学ぶLD, ADHD, 高機能自閉症等の子どもたちの支援が、クローズアップされてきているが、皆様の実感はいかかなものだろうか。これは、身近に体験しているいないで、感じ方や切実感に大きな隔りがあるようだ。

文部科学省の全国調査結果では、クラスに1～2人いるという計算になる。通常の学級のどのクラスにも、特別な支援を必要としている子どもがいておかしくない、いることが予測されるという実態を報告している。このことを納得される方も疑問に思われる方もいるのではないと思う。

私は、通級指導教室（情緒）を長年担任しているが、「特別な支援」を求めている子どもたちの存在と特別支援教育の大切さを目のあたりにしてきた。特にこの数年は、目を見張る思いでいる。東京都公立学校情緒障害研究会の調査では、平成13年度には、通級指導教室（情緒）に通う小学生は858名だった。平成17年度は、1775名、約2倍にも増えている。通級児に限らず、都内の通級指導教室の相談件数は急増している。全国状況をいつも先取りしてきた東京の、こんな実態は参考にしていただけないかと思う。

通常の学級に学校訪問すると、こうした子どもたち

の苦戦している生の姿に接する。LD, ADHD, 高機能自閉症という名称が一般化されてきたとはいえ、指導についてはまだまだ模索の時期である。混乱している子どもたちのニーズに、的確に応じた支援には至ってはいないのが現実である。もう少しの「配慮」と「指導の工夫」、「校内の協力体制」があれば……。学校や指導が変われば、子どもたち自身の生きづらさが軽減されるに違いないことを痛感する。通常の学級を基盤とする「特別支援教育」の充実は急務であり、必ず、教育全体の大きな課題になってくるに違いないと感じている。

2. 特別支援教育を「特別」なものにしない

特別支援教育は「特別」なものではない。反対に、「特別な」ものにしてはいけないのだと、最近強く感じている。「個を大切にする」という、教育の原点を、学級を開き、学校を開いて、多くの人の「目」と「手」で、行っていこうとするに過ぎないのだと思う。

「個を大切にする」温かな雰囲気

昨年、小日向台町小学校に異動になった。特別支援教育体制づくりに思いを馳せて新しい職場に来て、まず、「あー、これは本当に助かったな」と、感じたことがある。学校の雰囲気が、一人一人に優しい。子どもに対しても、大人に対しても。これは教育相談担当からコーディネーターになった先生の活動のおかげかなと思う。小規模校ということもあるが、「Aさんがこうだった」「Bさんが心配だ」ということが職員室で話題になるし、「C先生、ちょっとめげているみたい」などと誰かが教室にのぞきに行くといった具合だ。どこでも今、校内委員会ができたかどうかなどが話題にされるが、私は、一番大事にしないではいけないのは、こんな温かな雰囲気づくりではないかなと感じる。指導で悩んだとき「話せる」「話すといいことがある」が校内支援体制の基本ではないだろうか。言い換えると、「話せるように」とは、耳を傾ける人がいるということだ。耳を傾ける人になる、話し合える職場にしていくことが大切ではないだろうか。一步進めて、「話すといいことがある」が、指導効果の実績作りだ。ここからが、校内委員会・コーディネーターの力のふりどころになる。

全校で支援するという経験と実感

本研究会の実践報告に、複数の支援が必要な子どもたちが入学してくることが分かった時の対応がいくつかあり、類似するところが見られた。

入学式を前にして、保護者の相談、子どもたちの訪れがあった。入学式の会場で、全校職員の打ち合わせを行った。どの子がどの席に付くか、予め予想される行動は何か、事前にできる配慮（控え室での声かけ、入る時間、補助児童の割り振り方等）、誰がどう支援するか……。式全体の流れを追いながら真剣に話合ったという。

実践してみた感想が一致していた。入学式の打ち合わせも例年になく綿密になって、入学してくる誰に対してきめ細やかな配慮が考えられたというのである。もちろん、支援を必要とした子どもたちは、多くの人に見守られて、ほとんどが大過なく学校生活のスタートを切ることが出来たという。特別な支援を考えていくうちに、結果として、他の児童への指導も上手くいった、深まったという感想だ。

入学式は、子どもたちたちにとって学校生活の入り口になるところだ。保護者にとっても不安は大きい。事前につかめなかった支援の必要な子どもも、きめ細やかな配慮があれば、どんなに救われるだろう。LD, ADHD, 高機能自閉症の子どもたちには、何より「環境調整」が大事なことだ。幼稚園から学習主体の学校への移行は想像以上に厳しさがある。

19年度の4月。どこの学校でも行われる入学式。皆さんの学校で取り組めることはないだろうか。全校で取り組む実感がもてた、特別支援教育の温かさときめ細やかさを確かめることができた、そんな声が挙がると嬉しいのだが。

学校の組織的な取り組み

コーディネーターを特別なものにしていくことはいかがかな、と思う。コーディネーターの専門性をどう高めていくかが語られる。それは本当に大切なことだ。でも一方、特別支援教育を一握りの専門家集団に任せていってしまうことは、特別支援教育の理念に反する。誰もがコーディネーターをできるようにしていく視点を失ってはならないと感じるこの頃である。コーディネーターは、色々な人になる。個人の性格や資質に頼っていくことはできない。誰が、コーディネーターになっ

でもやりやすくしていくことが望ましいことではないだろうか。

まず、校内委員会の開催日時の保証。

午後はどの学校も予定がぎっしりで、なかなか会議の時間を作ることは難しい。いくつかの学校の工夫を聞くと、「職員会議後に時間をとる」「年度初めに、年間予定に入れる」「企画会の最後に時間を入れる」等々が出てきている。効率よく話し合いが進められるような工夫をしていた。議題や情報の整理をしておく。話し合いの方向性の選択幅を予め話し合っておいたなど。それには、コーディネーターの相談役が一人でもいると助かる。

次に、機能的に動ける組織化。

校内委員会は、校内運営に当たって責任ある人、責任がとれる人に入ってもらふ必要があると思う。それにはどうしても組織は大きくなる。その組織をどう機能的に動かしていくかが課題になる。全体で大まかな方針が出せたら、小回りのきく数人で、対応できるようにしていくことが大切だと思う。臨機応変に（支援チーム・小委員会等）対応できないと結局のところ力になれないという声が、研究会の討議の中で聞こえてきた。

校内の既存の会議や機会活用。

校内委員会の活動だけでは、どうしても不足する。既存の会議や機会を意識的に特別支援の目でもとらえ直していく必要がある。例えば、生活指導職員朝会。クラスのこと生活指導上の課題などが話されていると思うが、忘れ物についてであれば、ADHDの特性と指導についてなど、発達障害の面からもスポットを当ててみていく。「なぜか」「どうするとよかったか」を話してもらいと深まる。職員会議の中に、「校内委員会から」などの議題を定例化してもらふ、学校便りのスペースをもらうなども工夫として報告されている。

校内研究に特別支援教育の視点を入れる

小日向台町小学校の校内研究は、国語を通した「話す」「聞く」で、一人一人の子どもを生かす授業を目指していた。研究組織に「低学年」「高学年」に加えて、「特別支援部」を設けた。「聞く」「話す」に、軽度発達障害も視野に入れて、指導のねらい、指導の段階表、指導方法の工夫を特別支援部で考えてみた。また、通級から、軽度発達障害の子を想定した「インタ

ビュー」の模擬授業を行って、特別支援部からの提案とした。

東京コーディネーター研究会では、学級集団の状態によって、学級経営上取り組むことが違ってくことを明らかにしてきた。その上で、授業の中で、個別支援をどうしていくのか、「席をたつ」「一番にこだわる」などの状態別に「学級全体」と「個への指導」の両方を繋げながら考えてきた。「体育の授業では」、「算数の授業では」などの教科指導別、「係活動」「遊び時間」などの場面別にも検討してきている。

そこで得たものは、今後の特別支援教育の深まりと広がり、通常の学級での授業改善と結びつけてくことによって左右されるなという実感である。特別支援教育というと校内体制と考えがちだが、授業の中で、学級経営の中で、日常的にできることを探していくことの方が重要だ。授業改善の視点、で取り組むことを考えていかなければ、本当の効果的な支援は探せないのだと感じてきた。

どこの学校でも、授業改善の研究はあると思う。特別支援教育の視点からのとらえ直しがあると、全教職員が一つの基盤で考え合うことができる。教科書や指導書、指導案も、特別支援教育の視点で見るとたくさん改善点があるように思う。日頃の「授業」「学級経営」にこそ、特別支援教育の工夫を生かすのだという方向性をもつことを大事だ。こう考えて進めると、特別支援教育が、一握りの関心ある人のものにとどまることなく、多くの教師、学校全体の課題になっていくと思う。

3、「社会性」を育てる重要性

社会に出て、子どもたちを助ける力は何か

LD、ADHD、高機能自閉症の子どもたちは、学習の場面で、自信や意欲を失っている。しかし、更に子どもたちの姿をよく見ていくと、言葉で上手く伝えられない・友だちの輪に加わるスキルが身につけていないなど「社会性」の課題が深く横たわっているのが分かる。そこがこの子どもたちの将来を左右する大きな問題であり、教育が考えていかななくてはいけないことなのだと思う。社会性を「どこで」「どのように」育てていくかを、今後の特別支援教育こそ腰を据えて研究していかななくてはならないと感じる。

授業改善というと、学習面をまず考えると思う。軽度発達障害の子どもたちは、学習場面でつまづく。しかし、多くの通級児童を卒業させ、卒業後の姿も追ってきた私は、声を大にして言いたい。この子たちの伸ばすべき力は「社会性」だと。教材や指導法の研究を「学習の障害」に狭めることがあってはならない。今後、通常の学級で、「自立活動」に類する視点がいると思う。難しいことだが、必要なことなのだから、困難に目を背けてはいけないと思う。「教科が切り口でも、出口は社会性」であって欲しい。

卒業生のAさんがこの間教室に訪ねてくれた。初めて給料をもらったから、先生にクッキーを買ってきたというのだ。大変嬉しかった。「私、職場で始めに、『気が利かないから、はっきりこうしろああしろと言って下さい、言われないと分からない人なので』って言ってしまったんだ。よかったよね、先生？それで。」というのである。自分で考えたコミュニケーションであり、身につけたソーシャル・スキルだった。さまざまに混乱した小学生時代、自信を失いそうになったAさんを見てきた私は、こっそり涙ぐんだ。

通常の学級で「社会性」を育てることは難しいことだ。例えば、一番へのこだわり。席も一番前、プリントも一番先に欲しい、テストは百点でないと……。様々な実践報告が今、本研究会ではまとめられている。例えば、テストは青で直して百点にしていたが抵抗がある。赤と差異の少ないピンクで直した。漢字頑張りカードも、できたところは赤だけれど、できなかったけれどやったところはピンクにする。クラス全体で取り組んだところ、他の児童もやる気が出た。こんな実践がいくつも挙がってきている。個のニーズを考えた工夫やスモールステップ。クラス全体で、そうした指導をどう位置づけるのか、私たちの研究のしがいを感ずる。

通常の学級以外で力を伸ばす

通常の学級の集団指導だけでは、十分その子自身の力を伸ばすことができないことがある。整備された環境で、指導のねらい、場の構成を、個のニーズに焦点を当てて用意し指導する必要のある児童もいる。より専門性のある指導の場として、通級指導教室や学校外の療育機関の活用も考えられる。そうした取り出し指導の場として、私が勤務するコミュニケーションの教

室「こひなた」（通級指導教室）について、紹介したい。

通級してくる児童は、通常の学級に在籍するLD、ADHD、高機能自閉症等の子どもたちである。課題は、大きくまとめて3つあり、それに応じた指導を行っている。

<学習上の課題と個別指導>

知的に大きな遅れはないが、認知の偏りや注意集中の困難さがあり、もっている力があっても学習の積み上げがなかなかできないでいる。通級指導では、刺激の少ない個別学習室で、その子にあった教材を用意し、マンツーマンの指導をしている。

<行動上の課題と小集団指導>

在籍学校では、落ち着かない、友達とトラブルになる、興奮するなど集団生活に不応を起している。小さな集団で、一つ一つソーシャルスキルを身に付けていく指導が必要不可欠になっている。みんなと一緒にどう行動していくか、適切な言葉でのやりとり、自分の気持ちのコントロールの仕方などを、スモールステップで具体的な学習をしている。

<環境調整の課題とコンサルテーション>

三つ目は、環境調整の課題である。一見して障害が見えにくく、なかなか理解されずらい子どもたちである。いつも周囲の誤解や不協和音にさらされている。保護者の理解、担任や学校の理解を深めていくこと、お互いのすれ違いを調整していくことも教室の大きな役割となっている。きめ細かに保護者と面談するとともに、学校を訪問する機会を多くもち、居場所づくりをしている。

「社会性」を育てるために必要な「小集団指導」

この指導の中で、「小集団指導」は特に社会性を伸ばす指導として大切である。通級という個別指導のイメージが強いと思う。今後の特別支援教育では、ソーシャル・スキルを育む小集団指導の場とその内容をしっかり研究していく必要があることは多くの方が指摘している。

「こひなた」では、3つの小集団指導の場で、社会性を育てている。ソーシャル・タイムの時間には、かくれんぼ、いす取りゲーム等の遊び、風船バレーボール、ドッジボールなどの競技を楽しむ。ルールやきまりを守り、協力したり競い合ったりすることで、集団

生活に必要な社会性スキルを身につける。コミュニケーションの学習では、良い姿勢で、話し手を見て、話をきちんと聞きとり、質問に答えられるようにする。「聞く態度」ができてくると、通常の学級でも受け取る学習量が違ってくる。また、意見の発表や体験を順序立てて話すことができるようにしている。他人の話に口を挟まないなどの会話のルールも学習する。運動・動作の学習では、リーダーにしっかり注目して、動きを模倣することを学ぶ。体の部位や動作をどう意識化できるか、言葉かけや教材を工夫している。指示を聞いて素早く動く、周りの動きに合わせて動くなど集団へ参加する力を育てている。『次がある』『ドンマイ』など気持ちを整理するするキーワードも指導している。

都立梅ヶ丘病院や東陽町のYMCAなど先進的に軽度発達障害のある子の支援に取り組んできたところは、早くから、ソーシャル・スキルを学習する小集団指導に取り入れてきている。これからは、通常の学級で全力で支援することと、専門的に力を培って行くことの両面を考えていかなければいけないと思う。学校教育の中での専門的取り出し指導の場として、通級指導がますます注目されてくることと思われる。同時に、特別支援学校や特別支援教室もどんなことができるか一緒に考えていただけたらと思う。

4、「対応」でなく「指導」にする（個別指導計画づくり）

個別指導計画への取り組みは、まだまだのようだ。校務の中でも、今、大変「書く」ことが多い。大変さが印象なのだと感じる。児童を取り巻く環境、人と人がそれぞれの理解を深め、理解ある温かな支援を協力して作り出していく・知恵を集めていくことが大切である。次のようなことに取り組んでいる。

書けることから、できることから

「こひなた」では、通常の学級の「個別指導計画」づくりを在籍校担任とともに作成している。週の大半を過ごすのは在籍校である。通常の学級での生活・学習の中で、どんな支援が行われ、それと通級指導がかみ合うことで、初めて効果を上げる。通級している担任全員に、児童の『アセスメントカードの記入』『通

常の学級の個別指導計画の作成』をお願いしている。文京区は小学校が20校あり、コミュニケーションの教室は二つある。50名の通級児の担任をお願いすることになる。A4・1枚の簡単な用紙である。資料にしなながら、互いに「指導のねらいの絞り方」「手だて」「評価」を話し合うことに重点を置いている。書けないことは後回し（後で話し合う）、書けることからが合い言葉だ。

個別指導計画はあまりハードルを高くすると続かないと思う。書いている、相談しているうちに書くことが増えていく。そんなことが、今の「通常の学級での個別指導計画づくり」には必要なのではないだろうか。

小さなチームでの検討

通級のないところはどうか。個別指導計画の実践例も研究会で聞くことがある。校内委員会で検討したということももちろんあるが、小さなチームに分けて話し合うと、かえって深まったという声が聞かれた。一人の目では見えない、考えが詰まることがあるけれども、あまり人数が多いと意見が活発に出ないという側面もある。チームで相談しあったこと、作成してみたことを、全体で確かめたり、専門家の助言を受けたりすることの方が効率よくよい指導計画ができたという報告だった。

5、チャレンジ精神で

新しく取り組むことは難しいが、やりがいもある。今、19年度を前にして、みんながスタートラインに着いている。手探りで、効果を確かめながら進んでいくことが多いと思う。これからは、実践家が舞台上上がる時期だと思う。子どもたちと日々接する実践家としての目と経験を生かしていただきたいと思う。頭でっかちにならずに、子どもたちの笑顔・表情をしっかりみつめ、よいと思うこと、これならできると感じたことをまず実践してみることだと思う。やったことを真剣に評価し整理していくことこそが大事になる。それには、様々な学校・地域で、積極的に実践交流ができるとよいと思う。お金も人もあまり期待できない中、特別支援教育の大きな財産は、子どもたちの成長を願う学校関係者と協力してくださる方々の意欲と、創意工夫にかかっていると思われる。

学校に、「心理」が、「福祉」が、「大学」が、「特別支援学校」が、「ボランティア」が、「地域」が入ってきた。学校や教師の幅をうんと広げることが必要になるだろう。

みなさん、がんばりましょう。

【主な著書】

「<教室で気になる子>の手だてとヒント」(編著)

小学館

「多動な子どもへの教育・指導」(共著) 明石書店

「高機能自閉症、ADHD、LDの支援と指導計画」(共著) ジアース教育新社

「通常の学級におけるAD/HDの指導」(分担執筆)

日本文化科学社

[ホームページ：東京コーディネーター研究会]

<http://www7a.biglobe.ne.jp/~tc-kenkyu/>